死体潜入捜査官レビン
＝棺桶実験編＝　「屍被りの男」

簑島　鉄人（みのしま・てつじ）

第０話　夕闇の蕾

1

「夕闇の蕾」というはかなげな呼び名とはうらはらに、アラリアン星域ブラックホールＢ四〇三には、常に犯罪の匂いが染みついていた。
宇宙政府にしか使用の許されていない光波シールドの陰で、レビンたち宇宙警察辺境部隊は、犯罪者が良からぬ証拠の隠滅にブラックホールに近づくのを、じっと待っていた。アラリアン星域標準時で、かれこれすでに四十五時間が過ぎていた。
「レビン室長！　船籍不明の小型艇発見。９Ｆθ９９８－７ｇ４１９に停船しました」
「うむ。デンビドアたちの船のようだ。何か排出されないか、様子をうかがえ」
待ちに待った「獲物」の到着で警察直属の士官たちは色めき立った。ここで、何らかの証拠をつかめば、長年謎とされてきた宇宙麻薬ヨンビニウム６３５、俗称「ヨンビロ」の流通ルートと製造工場、そしてなにより製造方法が解明できる。
待つ間もなく、それは排出された。
長さ２メートル、幅９０センチ程度の備品保管カプセルだった。小型艇はカプセルを、そのポイントにそっと置くように排出すると、方向転換をして、出発地と思われるスワミヒリ星の方へと戻って行った。
レビンは、小型艇がレーダーの捕捉範囲を超えるとすぐに排出物の回収に向かった。
排出物はすでに「夕闇の蕾」の引力圏内に入りこんでおり、緩やかに蕾の中へと引きずり込まれようとしていた。
「目標物、ホールの引力で加速を始めています」
「速度を上げて追尾しろ、必ず回収する」
「危険です。これ以上加速すると戻れなくなります」
「かまわん全力前進だ！」
レビンたちの中型偵察機アイバニー・タイプＢは、猛烈な速度でカプセルに近づいた。
「目標捕捉。しかし、誘引波回収の出来る速度ではありません」
オペレータのエラン人マトは叫ぶように状況報告をする。
「船速維持のままベータ砲門開放、ルギダス弾発射」
レビンはマトの報告は受け流し、次の命令を出した。クルーたちはギョッとしながらも命令に従う。
「砲門開放。しかし標的はどこですか？」

「蕾の中心だ」
「え？」
「良いから撃て」
「わかりました。標的ホールセンター。発射」
アイバニー・タイプＢの持つ砲撃実弾として最大のルギダス弾は「夕闇の蕾」の中心に向って発射された。
偵察機アイバニー・タイプＢは、高速のまま突き進み、目標のカプセルをも超えて、蕾の中心へ突進していった。
このままでは、ブラックホールの強い重力で吸い寄せられ、帰ることすらできなくなる。しかし、レビンは全く意に介せず、ただアイバニーの後ろ側に位置することになったカプセルを見ていた。
カプセルが目視で確認できるギリギリのところまで離れた時、「船速減衰、１８０度反転してホール離脱せよ」と、レビンは突然に命令した。偵察機は急停止しながら反転し、船体は逆方向へと加速した。ブラックホールの引力に逆らうように船速を速めると、重力で加速されたカプセルが猛烈な勢いでこちらに向かって来た。
「回収開始」とレビンが命令すると、誘因波が放たれ、カプセルは偵察機の中へと滑り込む。
「続けて後部レーザー光砲発射。目標はルギダス弾だ。同時にホールを離脱する。全速前進」と、レビンが命令するのが速いか、即座に後部砲門より、ラーザー光が放たれ、遠くに消え去りかけていたルギダス弾に命中する。

偵察機アイバニー・タイプＢは、前進する推力に加えて、ルギダス弾が破裂した強烈な爆風に押され、一気にブラックホールの引力圏外へと離脱。夕闇の蕾に食われることなく、安全圏への離脱を完了した。

2

回収したカプセルに入っていたのは何の証拠品でもなく、一人の男の死骸だった。この星域にもっとも近い、スワミヒリ星のスワミヒリ人。年齢は中年の中ごろというところだろうか。
「『ヨンビロ』の作りそこないでも入ってるのかと思いましたがね。これは瞬殺だな」
と、レビン直属の部下のマトは死体の胸の銃創を確かめ、「口封じですかね」と重ねて言った
「だろうな。死体損壊率は？」とレビンは簡単に答える。
「６５％。意識損壊率は４５％ですね」
「では『棺桶』につなぐぞ。用意しろ」
「え？　『棺桶』って、棺桶用のパイロットは連れてきてませんよ」とマトが驚く。
「私が入る」
「そんな！　無茶ですよ。棺桶用の意識遠隔操作システムは、まだ実験段階ですよ？　それを設備も簡易のものしかない環境で、室長自らパイロットになるって、あまりに無茶

だ」
「他に『棺桶』に入ったものはおらんのだ。意識損壊率４５％なら、これから残存意識は、急速に下がるだろう。いますぐ死体に入らなければ、何の手掛かりにもならん。すぐに用意しろ」
「ふうっ、わかりましたよ」仕方ないというポーズで言いながら、マトは、レビンが一度言い出したら聞かないということに、なかなか慣れないなと思った。

3

スワミヒリ星は小さな星で、宇宙政府に国交を開いて以降、大国は合併しあってゴトーという一つの国になっていた。そのゴトー国の中でも辺境の都市ロンネンという街にレビンは立っていた。
いや、実際に立っているのはカプセルに入っていた死骸だった。偵察機アイバニー・タイプBからの意識通信によって、死骸はレビンによって遠隔操作されているのだ。
死骸の名前はドンスラス・ジェイン。ロンネンのいかがわしい宿で娼婦の客引きを生業としている男だった。その稼ぎの片手間に、いま急速な勢いで人気を得ている「ヨンビロ」の売買を請負っていたようだ。
死骸の意識損壊率がひどく、レビンの意識で確認できたのは、その程度だった。このロンネンのヤマエン町あたりに仕事場か自宅かどちらかがあるようだ。
ドンスラスを蕾に沈めようとしたのは、組織の中でもかなり末端の者たちだったのは調

べがついていた。麻薬取引の現場でのささいないざこざから、流血沙汰か殺し合いに発展して、死体の処理に困ったのだろう。
だがそんな末端の人間の方が、今回の潜入捜査には向いている。幹部クラスの人間では、死からよみがえっただけで、騒ぎが大きくなって潜入捜査にもならない。
ドンスラスの姿をしたレビンは、フードで顔を隠しながらヤマエン町を歩き回って、ドンスラスの生前の記憶の想起を促した。意識損壊率の高い死骸では、実地で行動することが記憶の復活に効果的なのだ。ただ、知り合いに出会うと捜査に支障をきたす。フードの中からできるだけドンスラスの知り合いに会わないように注意しながら移動する。
繁華街の真っただ中で人通りは多かったが、逆にそれがゆえに、発見されにくく知り合いに出会う可能性も低いだろう。ドンスラスのわずかな意識の残り香に体をゆだねて歩いていると、みすぼらしいビルの一階の細い階段に強い「馴染み」感覚があった。階段を上るとドアのＩＤセンサーがほのかに光った。ビンゴ！　体組織認証だ。どうやらドンスラスの個人宅らしい。
中に入ると、大小さまざまな小物や、食べさしのクイッィクフードカプセル、客引きの報酬なのか、日々の受け取り証チップなどが部屋中に散乱していた。典型的な独身男性の雑然さだ。
壁に貼られた３Ｄヴィデオポートレートは、この星域で人気の女優のものが多かったが、その間に埋もれて一般人の、それも古めかしい紙の写真が貼られていた。
その写真にレビンは、ドンスラスの強い執着を感じた。どうやら別れた彼女、あるいは女房であるようだ。なんとかデカい仕事をして関係を戻したかったようだ。おそらく、そ

の執着心が、死体になってしまう事態を引き起こしたのだろうと想像できた。その心情を思って、レビンはなんとも、やりきれない気分になった。

小さなゴミだらけの机の上にこの星特有のゴム手袋型入力装置を持った情報端末があった。レビンは機器遠隔操作用の「バンジーシール」を貼り付け、アイバニー・タイプBのサーバーを経由して、ユーザーインターフェイスを見知った端末のものに変換し、すばやく操作する。端末からドンスラスのかなりの情報が手に入った。情報はアイバニーでも共有された。関連情報もすぐにわかった。これでドンスラスに化けて捜査活動を続ける事が、かなり簡単になる。

そう一安心した時だった、突然情報端末にウィンドが開き、馬に似たスワミヒリ人の顔を映し出した。

「ドンス。帰ってるのか！　ずいぶん探したんだぞ！　おめぇ、やべぇことになってるじゃねぇか！　わかってんのか！　ここを開けてくれ」と、その馬面は咳き込むように小声の早口でまくしたてた。端末の映像はドンスラスの部屋のドアモニターからのものだった。男は、ドンスラスの仕事仲間のエイメイ。この部屋のドアにセンサを仕掛けてドンスラスの帰りを監視していたらしい。部屋の入口まで来ているのだった。

レビンはドアを開け、あたりをうかがう演技をしながら、エイメイを部屋に迎え入れた。

エイメイは、ドンスラスが麻薬組織のデンビドア団から、対抗組織のロロアロ一家へ、「ヨンビロ」を横流ししようと画策していたのを手伝っていた仲間の情報屋だった。

「ハウオウ様が、お前の横流しをかなり問題視してるらしいんだ。どんな仕置きされっかわかったもんじゃねぇぞ。お前の横流しに俺が噛んでると分かったら、俺もあぶねぇんだ。

とにかく売上げありったけかき集めて詫びを入れろ。俺も腹ぁくくって、洗いざらいしゃべって、一緒に謝ってやるからよ」と、エイメイは、レビンには願ってもない話をもちかけてきた。

ドンスラスの情報を探っても、あくまで組織の末端の売人で、密売組織デンビドア団の全容に近づくには小物すぎた。どうやって組織の中核に食い込むかが課題だと考えていたところだったのだ。

「でも、おまえハウオウ様とどうやって渉りをつけるつもりなんだよ。俺たちじゃお目通りもかなわねぇじゃねぇか」と、ドンスラスに化けたレビンは、ドンスラスになりきって所在なげに答えた。

「そこだよ。いや、実はな、俺の情報屋の仲間内の一人が、ハウオウ様の右腕とも言われてる、ニインギャンって方と幼馴染なんだってよ。それを聞いて、俺は藁をもつかむ思いで、わたりをつけてもらったんだ。なんか口利きでもねぇと詫びを入れても見せしめにどんな折檻が待ってるかもわかりゃしねぇ。すぐにニインギャンさまと会えるよう連絡するから、おまえも来い。それしか手はねぇからな。」

馬面エイメイの強引な段取りに、弱弱しく合意するしかないドンスラス、を演じながら、レビンは潜入捜査が軌道に乗ってきた手応えを感じていた。

4

ニインギャンと会う場所は、ヤマエン町から数キロ離れたロンギ山の山中、国道と支道

が分かれる交差点近くの無人駐車場だった。
「始末される可能性がある」とレビンは感じた。それはエイメイも感じていたようだが、すでにエイメイにもドンスラスにも、ほかに選択肢はないのだ。レビンは最悪の場合宇宙警察の最高機密情報を、売春宿の客から聞いた噂話と偽って、手土産として取り入る心づもりにしていた。
実際ドンスラスが麻薬の横流しなどという大それたことをやろうと思ったのも、売春宿の客に政府の高官がいたからだった。うまくゆすって小銭を稼ごうとしたら、逆に横流しの話をもちかけられたのだ。客の方が一枚上手だったのだ。
予定の時間をはるかに超えて、ニインギャンはやたらと派手な車で駐車場に乗り付けてきた。この星でもここまでの車に乗る人間は、政府のお偉いさんか、脛に傷持つものか、どちらかしかいないだろうというくらいのものだった。
薄暗い駐車場へ、車から降り立ったニインギャンはたった一人だった。体は大きく体格も良い。たかがチンピラの命乞いと、完全にバカにしきった態度で、二人の前に立った。
「待たせたな」とニインギャンはぶっきらぼうに言うと、手に持ったペンライトで、エイメイとドンスラス＝レビンの顔を照らした。高圧的な態度で、脅しをかけているのだろう。
しかし、レビンの顔を照らした途端に、そのペンライトが猛烈に震えた。
「お前、ドンスラス。なんで生きている！」
ニインギャンは、まさに化け物に出会ったという勢いで、いきなり胸ポケットからビームガンを取り出すと、レビンに向かって発砲しようとした。
レビンはすぐに危険を察知して、近くの草むらに飛び込み、ペンライトの光から逃げた

がエイメイは事態が呑み込めていなかった。パニックに陥ったニインギャンのメクラ撃ちの弾がエイメイの左足に当たり、エイメイはもんどりうってその場に倒れた。
メクラ撃ちとは言え至近距離であり、ビームガンの総弾数は９５０。弾幕は止むことなく、レビンもまた何発もの弾を体に受けた。草むらの中を逃げたが限界がある。このままでは、ドンスラスの体組織の崩壊とともに、レビンの意識も崩壊してしまうだろう。つまりレビン自身も死ぬことになる。すぐにも意識操作状態からの離脱を行わなければならない。残念だが、潜入捜査は、ここで打ち切りだ。
そうレビンが思った時、一発の銃声が響き、ニインギャンのメクラ撃ちの音が急に止んだ。
倒れこんだエイメイが左足を抱えながら、ペンライトの光をめがけて、反撃の一発を放ち、ニインギャンの命を奪ったのだった。
メクラ撃ちが終わり、静寂が訪れると、エイメイはふと我に返り、デンビドアの幹部を撃ち殺してしまった事実に気づいて、大慌てで山を下りてしまった。

5

それにしても品のない「意識」だとレビンはやたらと派手な車を運転しながら思った。
レビンが乗り移っていたドンスラスの死体（ボディ）は、ニインギャンに撃たれて、乗り捨てるしかなかった。代わりに、レビンはニインギャンの意識に入り込むことにしたのだ。

医療スタッフと技術班の部下とを、転送装置を使ってロンギ山へ呼び寄せ、死んだばかりのニインギャンの体組織の壊死進行停止処置を行った上で、意識通信波の焦点をニインギャンにチューニングし直す。レビンはニインギャンの死体(ボディ)に無事乗り込むことができた。

戦闘班のスタッフを大幅に減らして、死体遠隔意識操作システムのスタッフを厚めに連れてきて良かったとレビンは思った。

いざ体の中に入ってみると、ニインギャンという男の意識がよくわかる。人殺しなど、なんとも思っていない、本当にどうしようもない男、それがニインギャンだった。ドンスラスを殺したのもニインギャンだ。いたぶりながらドンスラスを殺し、末端の部下に死体処理をまかせたらしい。

ニインギャンが、このあたり一帯の「ヨンビロ」の流通を一手に引き受けているデンビドア団の中核メンバーであるなら、その死体の意識を探るだけで、かなりの情報が手に入るはずだった。だが、ニインギャンの意識はかなり知性の低い、怒りと見栄ばかりが心に巣食っているだけで、なんの手掛かりも得られなかった。どう考えてもデンビドアのような中規模組織の幹部の器とは思えない。

何より彼らの商品であるはずの「ヨンビロ」の事について知識が無さ過ぎた。死んだばかりでかなりの残留思念があるのに、意識のどこを探っても「ヨンビロ」の流通ルートも仕入れ値も誰から購入しているのかもさっぱりわからないのだ。

最初は単なる用心棒かとレビンは考えたのだが、金で雇われているようなビジネスライクな意識もなかった。あるのはただ、デンビドアの頭目ハウオウへの忠誠心ばかりなのだ。

「裏役周しだな」とレビンは推測した。表だって行動はしないが、頭目の命令なら、どんな汚い事でもやる、裏工作部隊。そのまとめ役なのだろう。おそらくドンスラスの抹殺命令もハウオウから直接指示が出ていたに違いない。

「お前のおかげだ、ギャン」と、いきなりデンビドアの頭目ハウオウの頼りなげな表情が、レビン＝ニインギャンの意識の中に立ち上ってきた。レビンの想像が正解だったのだろう。これだけ立派な組織の頭目に心から頼られている。そんな満足感がニインギャンの心からはみだすように滲んできた。

典型的な裏役まわしだ。と、レビンは思う。汚ない事はニインギャンに押しつけ、いざとなれば切って捨てるつもりだ。そんな思惑にすら気づけないほど、ニインギャンは知性が低かった。

ニインギャンの低脳な落ち着きのなさは居心地の悪さはあったものの、死んだばかりで記憶は生々しく、デンビドアのアジトは、すぐにわかった。

ロンギ山からヤマエン町とは反対の方向にあるロンロンギ市の小さなビルに、商社の名前を借りて、一味は「ヨンビロ」を売りさばいていた。

「戻りやした」と、レビンは足でドアを押し開け、できるだけニインギャンの粗暴な「クセ」を再生させながら部屋に入った。真正面の大きな机に座って、ゴム手袋型の情報端末を操っているのがハウオウだった。

素速くレビンは事務所内の様子を観察する。ハウオウの他には幹部とおぼしき人物が二人、事務処理を行なう者が一人ボディガードらしき人間が三人いた。

「どうした？　どこか具合でも悪いのか?」と、目ざとくハウオウが聞いてきた。

あたりを観察するという仕草自体がニインギャンらしからぬ行動だったのだろう。さすがに頭目となるとポイントを外さない。
「どこいっちまったかな。噛まれたら痛ぇんですよ、イエムシは」と、レビンは咄嗟にウソをついて飛び回る虫の姿を目で追うふりをした。
「頭領！　波長の割当、出ましたよ。えらいこってす、宇宙警察ですよ」
「なんだと！」
ハウオウはニインギャンを疑うことより、通信役の部下の報告に驚いた。宇宙警察の名前に部下たちもみな驚いて、騒然とした雰囲気になった。
「どうしたんでぃ？」とレビンはニインギャンとはウマの合うヨンドーレというハウオウの武闘派ボディガードに聞いた。
「ここんとこ変な通信波が近くに到着してたんだ。頭領が気になるから調べろっつって波長の割り当てを色々あたってみたんだよ。そしたら宇宙警察が使う帯域だったらしい」
アイバニーの通信波が感知されたか！　とレビンは少し慌てた。今回の出航は、あくまで棺桶システムの実験用で、通信波にはさほど強力なスクランブルはかけていないのだ。逆探知されることも充分に考えられることだった。
「発信源は特定できそうか？」とハウオウは焦って通信士とおぼしき部下に確認した。
「やってみます。…なんとか出…、うわ、この町の真上に止まってやがる」
「なんだと！　おい、衛星があったろ、あれでスキャンしろ」とハウオウは矢継ぎ早に指示を出す。アイバニーは、レビンを追って上空まで来ているようだ。まずい。
「行けます。画像出ます」とハウオウの部下はテキパキと作業した。

壁に掛けられたディスプレイが一瞬ジジっと音を立てたかと思うと、宇宙空間らしき場所が映し出された。
「あれだ」と誰かが指差す。通信士も気づいたのか、その部分を拡大表示する。
まぎれもないアイバニー・タイプBの姿が映し出された。
「なんだありゃ？　ずいぶん小さい船だな」
「うむ、偵察機レベルだな。…よし」とハウオウはしばらく考えたが、すぐに命令を下した。
「奴らの船を乗っ取ろう。おい次元転移波を逆転させて、こっちから乗り込んでやれ。おい、ヨンドーレ、おまえ、ちょっと行ってくれないか」
こいつら、宇宙海賊あがりだったか！　とレビンは想定外の展開に舌打ちをした。転移装置の送信波を逆にたどって船を乗っ取るというのは海賊たちが得意とする荒っぽい占領の仕方だ。
「乗り込むのはいいですが、相手は警察ですぜ。いいんですか？　おやっさん」とヨンドーレは聞いた。
「偵察艇くらいなら、なんとでもなる。かまわん、行け」とハウオウに躊躇はなかった。
「わかりやした」とヨンドーレは、数人の「兵隊」を集めて隣の部屋に移動した。転移装置があるのだろう。
転送はすぐに始まった。レビンは、ハウオウのそばにゆっくりと近づいた。時間の余裕はない。なんとか証拠をつかまねば潜入捜査の意味がなかった。

6

急に転送装置が勝手に稼働したかと思うと、屈強で、手荒なことに慣れている風の男たちが次々にアイバニーに乗り込んできた。
レビンの部下のマトはあわてて銃を構えようとしたが、あっというまに手首を蹴り上げられ、銃を奪われてしまった。
この艦には、戦闘に長けた人材は皆無だ。みな「棺桶通信システム」の実験室のスタッフばかりなのだ。これだけの「兵隊」たちが乗り込んで来たのでは抵抗のしようがなかった。
「頭領、目標占拠しましたぜ。艦内くまなく調べましたが、警官なんかひとりもいやしねぇ。どうしやす？」とヨンドーレは首につけた簡易連絡器でハウオウに連絡をした。乗組員は全員で18人。アイバニーの操縦室に全員が集められ、乗り込んで来た「海賊」達全員で見張っていた。
「所属と偵察機の目的を吐かせろ。言わないなら、そっちの情報端末をひっかけてやれば分かるだろう」
ヨンドーレたちは銃でおどして偵察目的を白状させようとしたが、誰も従わなかった。警察なんだから、それも当然かと思いながら、ヨンドーレは情報端末を乗っ取るためのスキャナ、「ナイトロンα」を両手で持つと、アイバニーのメインコンソールの裏側にガチャリと貼り付けた。
「準備できましたぜ、頭領」とヨンドーレが連絡すると、ハウオウはすかさず、

「まずは一番太い回線の通信波の送り先を探れ。本庁か星域統括か、どこかにつながってるはずだ。その回線を遮断するんだ」
「了解しました」と地上のハウオウの横でオペレートしている部下の一人が、端末の画面を見ながら手持ちタイプの通信回線コントローラーを操作していた。
レビンは、ハウオウの横でボディガードするふりをしながら、アイバニーの様子を知ろうと様子をうかがっていた。
「送り先分かりました」
「どこだ」
「下です」
「何？」
「真下です。うちの事務所だ」
送信波の送り先が、自分達の今いる場所だと知って、事務所にいる者達はざわついた。
「おい、もっと正確に位置が出せるだろう、調べろ」
と、ハウオウは部下を急かす。画面は拡大されて事務所の間取りまで映し出した。もっと拡大していくとまさにハウオウのすぐ隣、ニインギャン=レビンの位置で送信先を示すカーソルが点滅した。
「ギャン、てめぇ、裏切ったか！」とハウオウが言うが早いか、その場にいる部下たち全員がレビンに銃を向けた。
「いや、違うな。そうか化けてやがるんだ。てめぇ、偽もンだな。かまわねぇ、ブチ殺せ」と、ハウオウが命令を出すのと同時にレビンは、ニインギャンの体から離脱した。次

の瞬間、ニインギャンの体は蜂の巣になっていた。

7

ヨンドーレは、アイバニーの乗組員達を見張りながら、操縦室の片隅にある、大きな金属の箱が気になった。やたらと数多くのケーブルが繋がれ、計器類も何か所かに設置されている。人が一人入れ込めそうなほどに大きい。

と、その時送信波の送り先を解析していたはずの地上事務所が騒然とした雰囲気になったのをヨンドーレは、簡易連絡機の物音で察知した。

「かまわねぇブチ殺せ」というハウオウの声が聞こえた。どういうわけだ？　いったい、何があったというのだ？

ヨンドーレが地上の様子に気を取られた時、突然に見ていた金属の箱がガバっと開き、中から体の大きなエータ人が飛び出して来た。エータ人特有のアリクイのような顔、一回り大きな体格、そして、腕から射出される独特の触手。

その触手が、両手で操られる鞭のように不思議な角度で旋回したかと思うと、アイバニーを占拠していたハウオウの部下たちの銃に巻き付き、あっという間に取り上げてしまった。

咄嗟にヨンドーレは、アリクイ・エータ人に飛びかかって乱闘に持ち込もうとしたが、エータ人の流れるような体術で体を掬われ、無様なほど見事にその場に倒れこんでしまった。ヨンドーレの動きをきっかけに、エータ人に飛びかかろうとしていたヨンドーレの部

下達も、ヨンドーレが倒されるのと同時にエータ人の触手で強烈な攻撃を受け、次々にその場に突っ伏した。

「マト、パラライザだ」とエータ人は指示を出す。マトはコンソールの緊急ボタンを押した。特殊防振服を着ている乗組員以外は強烈な痺れが襲って動けなくなる。

「ふーっ。えらい目にあった。室長、もう、こんな無茶はやめてくださいよ。なんの準備もしてなかったんですから」とマトはエータ人に向かって言った。エータ人はまさしくレビンだった。ニインギャンの体から「棺桶システム」の中へ意識が戻り、ヨンドーレ達を一網打尽にしたのだ。

「愚痴を言うのはまだだ。離脱前にデンビドアの事務所で頭目の情報端末へバンジーシールを貼った。すぐに解析を始めてくれ。気づかれる前にな」とレビンはマトに指示を出した。マトはすぐに解析にかかり、ヨンビニウム635の流通ルート特定の重要情報を入手した。

ハウオウがバンジーシールの存在に気付き、回線を中断したのは、マトが解析を終えて十五秒後、アラリアン星域時の六十三時四分七秒のことだった。